

西郷菊次郎

京都2代目市長

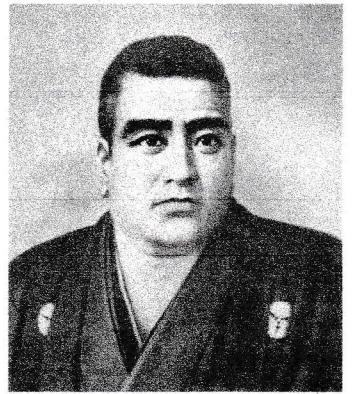
(明治37年~44年)



愛加那

龍家二男佐栄志の娘。

安政六年十一月、龍佐民夫妻の媒酌により西郷と結婚した。西郷33歳、愛加那23才であった。



西郷隆盛

西郷南洲流謫地跡

碑文

安政五年(一八五八)西郷さんは鹿児島錦江湾に僧月照と身を投じたが蘇生した。島津二七代斉興の裁量により幕府に対しては、死亡したと届出で、菊池源吾と変名して、この地に潜居と命じられた。西郷さんに乗せた砂糖積船福徳丸は安政五年十二月十日山川港を出帆して翌二十二日西郷松のそびえる阿丹崎に到着した。はじめ、美玉新行の空家を借家として二ヶ月住んだが、その後小浜の大島の名門郷士格龍家の離れ家に移転した。安政六年三月から二年八ヶ月この家で過ごした。この年の十一月八日龍佐民夫妻の媒酌により龍家二男家の娘愛加那(愛子)と結婚したが、西郷さん三十三才、愛加那(愛子)二十三才であった。翌文久元年菊次郎誕生、二年有余住みなれた龍家の離れ家からこの地に新居を構えた。この新居に移転した次の日召喚状を受取り文久二年一月十四日この地を離れた。この新居では二ヶ月たらずの生活であったが、この時愛加那(愛子)は長女菊草をみもつていた。長男菊次郎は九才で菊草は十四才で、西郷本家に引き取られたが、菊次郎は京都市長を七年つとめた。菊草は大山巖元師の弟精之助に嫁いだ。のこされた愛加那(愛子)はただ一人淋しく、この家でくらし明治三十五年六十六才で死去した。墓地は近くの弁財天墓地内にある。この住居は原型のまま再建し現在に至っている。

天の此人に大任をくださむとするや、まず其しん志をくらしめ其身を窮之すと、まことなる哉此言や唯友人西郷氏に於て是を見る、今年君の謫居せられし旧所に碑石を設くるの挙あり、島民我が一言を需む、我卒然としてこれを誌し以てこれに応ず

明治二十九年晩夏 勝 安芳

愛加那碑文(龍愛子)

一八三七(天保八)年、愛加那(愛子)は龍一族の二男家、佐栄志の娘として生まれた(幼名・於戸間金)。少女期から芭蕉布を織りはじめ、やがて村の女たちに教えるほどの腕前となる。氣丈で働き者であった。一八五九(安政六)年、鹿児島から遠島になった西郷吉之助(後の隆盛)と結婚し、この家で暮らす。菊次郎と菊草の二児に恵まれたが、三年後、吉之助は島を去り、やがて二人の子も西郷本家へ引き取られた。吉之助は明治維新の立役者の一人として歴史のその名を残した。愛加那(愛子)は、この家でひっそりと暮らし、ひたすら夫と子らに会う日を待った。一九〇二(明治三十五)年八月、大雨の中を畑仕事に行き、そこで倒れた。享年六十六歳。愛加那(愛子)は島妻の生涯を終えた。

愛加那没後百年を記念して
二〇〇三(平成十五)年十二月二十五日建之

記念碑の由緒

明治二十九年時の大島島司笹森儀助氏は南洲翁の遺跡に記念碑のないことは淋しい限りであるとして、広く大島郡内に呼びかけ、郡民の賛同を求め喜捨を集めて記念碑建立を企画した。この事業も諸につき碑文はどうするかという段階になった時、当時なお健在であった勝海舟先生に頼むことと決め、同年八月島司が東京出張の折、直接海舟先生に依頼して碑文を書いてもらい、その書をそのまま記念碑に彫刻したものである。明治三十一年記念碑は完成し現在地に建立された。

なお、この石碑は『西郷菊次郎と台湾』の著者、佐野幸夫様のご寄附によって建てられたものです。

龍 マサ子